

## ホメテヤラネバ

外山磁比古

ものを考えるのは、いわゆる仕事と違って、なかなか、うまく行かない。仕事なら、どんどん片付いて行くが、考えることは、いつまでたってもらちのあかないことがすくなくない。同じところを堂々めぐりしている。そのうち、これはダメかもしれない、と思い出す。そんな場合、思いつめるのはよくない。行きづまったら、しばらく風を入れる。そして、かならず、できる、よく考えれば、いずれは、きつとうまく行く。そういつて自分に暗示をかけるのである。間違っても、自分はダメなのではないか、いや、ダメなのだ、などと思いつままないことである。

そういうように消極的だと、できるものさえできなくなってしまう。とにかく、できる、できる、と自分に言いかけなければならない。そんなこともだましが役に立つものかと笑う人があるかもしれないが、たとえ目先だけでも、もういけない、などと言えば、本当に力が抜けてしまう。自己暗示が有効にはたらくのはそのためである。

思考はごくごくデリケートなものである。前にものべたように、いい考えが浮んでも、そのときすぐにおさえておかないと、あとでいくら思い出そうとしても、どうしても再び姿を見せようとしな場合もある。

ある詩人は、半ば陶酔の状態で詩作をしていた。そこへ人が訪ねて来て、中断したら、そのあと、それまでのヴィジョンはすっかり消えてしまい、二度とその流れを再現できなかったという。

考えごとをしていて、おもしろい方向へ向い出したと思っていると、電話のベルがなる。その瞬間に、思考の糸がぶつぷりと切れて、もう手がかりもなくなってしまうという経験もする。まして、電話に出て、ひとしきり話をし

て机へもどつてくると、別の人間になってしまふ。さつき何を考えていたかなど、まるで忘れてしまっている。原稿を書いていて、電話に出る。終つて、また書き続けようとしても、それまでどういうように考えていたかがわからなくなつてしまい、混乱するというのもよくある。

それくらい姿をかくしやすいのが考えごとであるせつかくこれはと思つた着想などをほかの人からにべなく否定されてしまうと、ひどい傷手を受ける。当分はもう頭を出そうとしない。ひよつとすると、それで永久に葬り去られてしまいかねない。

そういう体験を何度もくりかえしていると、ひとの考えに対して、不用意なことばを慎しまなくてはならないと悟るようになる。

自分の考えに自信をもち、これでよいのだと自分に言いかけただけでは充分でない。ほかの人の考えにも、肯定的な姿勢をとるようになくなくてはならない。どんなものでもその気になつて探せば、かならずいいところがある。それを称揚する。

よくわからないときにも、ぶつづけに、「さつぱりわかりませんね」などと水をかけるのは禁物である。

「ずいぶん難しそうですが、でも、何だかおもしろそうではありませんか」  
とやれば、同じことでも、受ける感じはまったく違つてくる。すぐれた教育者、指導者はどこかよいところを見つけて、そこへ道をつけておく。批評された側では、多少、けなされていても、ほめられたところをよりどころにして希望をつなぎとめることができる。

全面的に否定してしまえば、やられた方ではもう立ち上がる元気もなくなる。自分でダメだと言うのでさえひどい打撃である。ましてや他人からダメだときめつけられたら、目の前がまっ暗になつてしまふ。

お互いに自分の過去をふりかえつて、とにかくここまですべてやってこられたのはだれのおか

げかと考えてみると、たいていは、ほめてくれた人が頭に浮ぶのである。ある老俳人は、ほめられたからこそ、ここまで進歩したとしてみじみ述懐している。ほめてくれた批評によって伸びた。けなされたことからほとんど裨益されなかったというのである。

友には、ほめてくれる人を選ばなくてはいけないが、これがなかなか難しい。人間は、ほめるよりもけなす方がうまくできている。いわゆる頭のいい人ほど、欠点を見つけるのがうまく、長所を発見するのがへたなようである。

ほめられると、われわれの頭は調子に乗る。つい勢いづいて、思いもかけないことが飛び出してくる。

ピグマリオン効果というのがある。四十人の生徒のいるクラスを二十人ずつ二つのグループA、Bに分ける。学力はAB平均して同じようにしておく、まず第一回のテストをする。Aのグループには採点した答案をかえすが、Bのグループの答案は見もしないで、教師がひとりひとり生徒を呼んで、テストの成績はよかったと告げる。もちろん、でたらめである。やがてしばらくしてまた、第二回のテストをする。前と同じようにAグループには点のついた答案を返し、Bグループにはひとりひとりを呼び出して、こんどもよくできていた、と答案は見せず、返さずに伝える。生徒はいくらか不審に思うが、ほめられるのは悪くない。あまりうるさいせんさくはしないでそのままにしてしまう。

こういうことを何度かくりかえしたあと、こんどは全員の答案を採点、AB両グループの平均点を出してみる。すると、ほめていたBグループの方がAグループより点が高くなっている。これがピグマリオン効果と呼ばれるものである。

まったく根拠なしにほめていても、こういうウンから出たマコトがある。まして、多少とも根をもったほめことばならば、かならずピ

グマリオン効果をあげる。まわりにうまくほめてくれる人がいてくれれば、いつもはおずおずと臆病な思考も、気を許して、頭を出してくれる。零囲気がバカにならない。いい空気のところでない、すぐれたアイデアを得ることは難しい。

考えごとをしていて、うまく行かないときに、くよくよしているのがいちばんよくない。だんだん自信を失って行く。論文や難しい原稿を書いている人にしても、書齋にこもりつ切りで勉強をしているタイプと、ちよいちよいたいたした用もないのに人に会うタイプとがある。

ちよつと考えると、籠城している人の方がいい論文を書きそうであるが、実際は人とよく会っている人の方がすぐれたものを書くようだ。仲間と話しをする。みんな、ダメだ、ダメだ、と半ばロクせのように言っている。それをきくだけで、自分だけ苦労しているのではない。まだ、ましな方かもしれないという気持ちになる。間接的にほめられているようなものだ。帰ると意欲がわくということになる。ひとりでくよくよするのは避けなくてはいけない。人と話すのなら、ほめてくれる人と会うようにする。批評は鋭いが、よいところを見る目のない人は敬遠する。

見えすいたお世辞のようなことばをきいてどうする。真実に直面せよ。そういう勇ましいことを言う人もあるが、それは超人的な勇者である。平凡な人間は、見えすいたことばでもほめられれば、力づけられる。お世辞だとわかっている、いい気持になる。それが人情なのではなかるるか。

われわれは、どうもお世辞を言うのにてれる。見えすいたことを目にするのを恥じる。しかし、どうせ、あいさつには文字通りの意味はないのである。朝寝坊した人でも人は「お早よう」と言う。ほめるのは最上のあいさつで、それによって、ほめられた人の思考は活潑になる。